

## 国語

※解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の一線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| ① 著名な作家に会う。  | ⑥ 感染タイサクをする。   |
| ② 薬を処方してもらう。 | ⑦ 耐震ホキョウをする。   |
| ③ 師を敬う。      | ⑧ コキョウに帰る。     |
| ④ ひと筋の光。     | ⑨ 問題の解決にツトめる。  |
| ⑤ 締め切りを厳守する。 | ⑩ シシヤ五入して計算する。 |

二、次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（問い合わせの関係で、一部省略している部分があります。）

あなたは、人の頼みを簡単に断れますか？

友達から何か頼まれた時、イヤなことはイヤだときっぱりと言えますか？

イヤだなあと思つていても、なかなか「イヤです」とは言えなくて、ずるずると相手の言うことに従つたりしませんか？

①この国では、なかなかイヤと言えない人が多いのです。

それも、あなたの弱さではなく、この国の文化と関係があるのです。

昔、アメリカ人のスタッフと仕事をした時のことです。

「～をやつてくれませんか？」と言うと、そのアメリカ人はにこやかに微笑みながら

「できません」と答えました。

僕はびっくりしました。

普通、私達日本人が何かを断る時は、すぐくつらそうな顔をするか、申し訳ないという悲しい顔をするか、すみませんという反省する顔をします。

でも、そのアメリカ人は、微笑みながら「NO」と言つたのです。

僕は衝撃を受けました。

そんな顔で「イヤです」と言う人を見たことがなかつたのです。

あんまり驚いたので、「どうして、微笑んでいるのですか？」と聞きました。

相手はキヨトンとして「どうして微笑んでいたら変なの？」と逆に質問してきました。

僕は「だつて、断るってことは、ストレスがたまりませんか？『NO』って言うのは、ハードルが高くないですか？」と答えました。

彼は、やつぱり、キヨトンとしたまま、「できないことをできないということは、当り前のことでしょう」とサラッと言いました。

それもそうだなと、僕は思いました。

でも、僕は、そしてたぶんあなたも、何かを頼まれて断る時は、とても苦しい気持ちになります。

そんな気持ちになりたくないから、なるべく、ムチャだと思う頼みごとも、聞こうとしてします。

どうしてなんだろう？と思いました。

イヤなことをイヤと断るだけで、どうしてこんなに苦しいのだろう。

《中略》

僕じやなくて多くの日本人は「イヤです」と言うことにストレスというか、抵抗を感じるのです。

どうしてなんだろうと考え始めました。

《中略》

そして、「世間」と「社会」という考えにたどり着きました。

「世間」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？ ひょつとしたらないかもしませんね。

「社会」はありますね。科目にもなっていますが、その意味ではありません。

②今から、「世間」と「社会」とは何かという説明をします。

### 『中略』

「世間」というのは、あなたと、現在または将来、関係のある人達のことです。

具体的には、学校のクラスメイトや塾で出会う友達、地域のサークルの人や親しい近所の人達が、あなたにとつて「世間」です。

「世間」の反対語は、「社会」です。

「社会」というのは、あなたと、現在または将来、なんの関係もない人達のことです。

例えば、道でそれ違った人とか、電車で隣に座っている人とか、初めていくコンビニのバイトの人、隣町の学校の生徒などです。

日本は「世間」と「社会」という、二つの世界によつて成り立つてゐるのです。

具体的にどういうことか、説明しましよう。

あなたはおばさん達の団体旅行とかに出会つたことはありませんか？

昔、僕が駅で電車を待つてゐた時のことです。

周りにおばさん達が何人かいました。

電車がホームに入つてきて、ドアが開くと、僕の前にいたおばさんが駆け込みました。

そして、四人掛けのシートの前に立つて、僕の後ろに向かつて声をかけました。

「鈴木さん！ 山田さん！ ここ、ここ！」

後から来たおばさん達は、その声に従つて、僕を追い越して当然のようシートに座りました。

僕ともう一人の乗客は、おばさんにブロックされ、シートに座れませんでした。

一般的なルールでは、乗つてきた順番にシートに座るはずです。でも、このおばさんは、僕達を無視して、後ろの仲間を呼んだのです。

どうです。こんな光景、見たことないですか？

僕を無視したおばさんは、冷たい人でしょうか？ そうじゃない、ということをあなたは分かるでしょう。

このおばさんは、おばさんを知る人達の間では、おそらく、世話好きで面倒見がいいと思われてるはずです。

おばさんは、自分と関係のある人達を大切にしているのです。

「世間」は、自分と関係のある人達のことだと書きました。

つまり、このおばさんは、自分の「世間」を大切にしているのです。

そして、次に乗つてきた僕ともう一人の乗客は、自分と関係のない「社会」の人なのです。だから、簡単に無視できるのです。

日本人は、基本的に「世間」に生きています。

自分に関係のある人達をとても大切にします。けれど、<sup>③</sup>自分に関係のない「社会」に生きる人達は、無視して平気なのです。

それは、冷たいとかいじわるとかではなく、生きる世界が違うと思っているからです。

あなたも、街で知り合いに会うと、気兼ねなく声をかけるでしょう。

「世間」に生きている人とは、普通に話せます。

でも、知らない人にはなかなか声をかけられないはずです。それは、「社会」に生きる人だからです。

日本人は、基本的に「世間」に生きています。

自分に関係のある人達をとても大切にします。けれど、<sup>③</sup>自分に関係のない「社会」に生きる人達は、無視して平気なのです。

われたり、交通が乱れてパニックになつていただろう。でも、日本人は、そんなことはなかつた。素晴らしい

X 、数日後、彼は戸惑つた顔をして僕に言いました。

「今日、ベビーカーを抱えた女性が、駅の階段を上がろうとしていた。彼女は、ふうふう言いながら、ベビーカーを抱えていた。信じられない。私の国なら、すぐに彼女を助けて、ベビーカーを代わりに持つてあげるだろう。どうして日本人は彼女を助けないのか？日本人は優しい人達じやなかつたのか？」

どうして助けないのか、日本人のあなたなら、理由は分かるでしょう。

日本人は冷たいからか？ 違いますよね。

④ベビーカーを抱えている女性は、

██████████

ですよね。

Y 、あなたと関係ない人だから、あなたは手を貸さないので。いえ、貸せないと言つてもいいです。他人には声をかけにくいのです。

もし、その女性が、あなたの知つている人なら、あなたは間違ひなく、すぐに助けたでしょう。

冷たいとか冷たくないとか、関係ないので。

私達日本人は、自分と関係のある「世間」の人達とは簡単に交流するけれど、自分と関係のない「社会」の人達とは、なるべく関わらないようにしているのです。

というか、より正確に言えば、関わり方が分からぬのです。

### 『中略』

驚くことに、ほとんどの外国には、「世間」はありません。「世間」は、とても日本的なのです。

欧米をはじめとしたほとんどの外国は、「社会」しかありません。

つまり、自分が知っている人達と知らない人達を分けないのです。

エレベーターに乗ると、日本人は、全員が沈黙したまま、決して目を合わせず、じつとドアの上に表示された階数の数字を見つめています。

僕もあなたもそうします。

お互いが他人で、「社会」に住む人達だから、会話できないのです。会話するつもりもないと言つてもいいし、エレベーターの中でどんなふうに話しかけたらいか分からぬと言つてもいいでしよう。

欧米では、エレベーターの中で、必ず、目礼か会釈か会話が始まります。

知らない者同士が会話することが当たり前の「社会」に生きているからです。エレベーターのような狭い空間で、とても近い所に人が立っているのに、黙っている方が不自然に感じなのです。

彼ら・彼女らは、日本に来て、全員が斜め上を向いたまま沈黙しているエレベーターを経験して、驚くのです。

お互いが他人で、「社会」に住む人達だから、会話できないのです。会話するつもりもないと言つてもいいし、エレベーターの中でどんなふうに話しかけたらいか分からぬと言つてもいいでしよう。

その後ろの人もまた、後に続く人がいたら、同じことをします。

「社会」に生きているので、後に続く「社会」の人を意識しているのです。

日本だと、こんなことをする人はめったにいません。

後に続く人は「社会」の人なので、無視していい人達なのです。もちろん、後ろから同じ「世間」に住む仲間が続いていたら、ドアを手で支えて、入りやすくします。

「世間」に住む人だから、当然なのです。

海外に行くと、このドアのちょっとした心配りに感動します。

また、英語を話す国々では、電車の中や道で、ちょっとでもぶつかったり、肩がふれたりすると、すぐに「エクスキューズミー」の言葉がでます。フランスなら「パルドン」です。「すみません」の意味です。

お互いが知らない「社会」に住む人だからこそ、丁寧に謝ろうとするのです。

そうしないと、いきなり、ケンカが起こる可能性があります。

日本では、都会では、軽く肩がぶつかったり、ちょっと足を踏んでも、誰も何も言いません。

小さな田舎で、お互いが「世間」に住んでいる時は、丁寧に謝ります。

でも、都市で、相手のことを知らない「社会」に住む人同士だと、軽くぶつかってくださいだとお互い、何も言わないのです。

これもまた、「<sup>⑤</sup>礼儀正しい日本人」のイメージを持つて日本に旅行に来た外国人が驚くことです。

海外旅行に行つたことはありますか？

まだなら、なるべく早く、海外に行くことを勧めます。

いろんな国に行き、いろんな風景を見て、いろんな文化を見ることは、自分が生きている国や街、文化を相対的に見ることに役立ちます。

「相対的」というのは、自分の生きている状況が唯一、絶対ではないと分かることです。

自分の今の状況はたったひとつの中解ではないんだという考えは、生き苦しさから私達を救ってくれます。

数年前、ツイッターで「なぜ勉強をするのか?」という質問に対する親の答えが話題になりました。

勉強をなぜするのか親に訊いたときに、コップを指して「国語なら『透明なコップに入った濁ったお茶』、算数なら『200mlのコップに半分以下残っているお茶』、社会なら『中国産のコップに入った静岡産のお茶』と色々な視点が持てる。多様な視点や価値観は心を自由にする」というようなことを返された。

素晴らしい答えでした。

「多様な視点や価値観は心を自由にする」ということが「相対的に考える」ということです。

私達は、苦しくなると、モノの見方が狭くなってしまいます。「もうこの解決方法しかない」とか、「これをやるしかない」「他にどう

しようもない」と思い込みがちになります。

そういう時、他の文化を知つていれば、いろんな考え方、見方ができるのです。  
それは、まさに「心を自由」にします。

(鴻上尚史『空気を読んでも従わない』)

(注)※1 「cool japan」：NHKのBS1で放送されている、「クールでかっこいい日本」を紹介する番組。

※2 「ツイッター」：SNSの一つで、写真や動画、文章などを投稿する無料のウェブサービス。

問一 線①「この国では、なかなかイヤと言えない人が多いのです。」とありますが、なぜ、日本ではイヤと言えない人が多いのですか。その理由を本文中の言葉を使って書きなさい。

問二 線②「今から、『世間』と『社会』とは何かという説明をします。」とありますが、筆者の言う「世間」と「社会」を本文中の言葉を使ってそれぞれ書きなさい。

問三 二ページの本文中の□で囲んだエピソードの中で、おばさん達はどうしてこのような行動をとつたのですか。その理由を、「世間・社会・僕・自分」という四つの言葉を使って書きなさい。

問四 線③「自分に関係のない『社会』に生きる人達」とありますが、これはどのような人達ですか。「人達」に続くように十字以内で本文中から抜き出しなさい。

問五  X  Y  Z に入る言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア また イ ところが ウ つまり エ なぜなら オ そして

問六 線④の空欄らんにあてはまる文として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア あなたにとつて「世間」に生きる人だから イ あなたにとつて「社会」に生きる人だから  
ウ あなたにとつて「同じ国」に生きる人だから エ あなたにとつて「外国」に生きる人だから

問七 線⑤「礼儀正しい日本人」というイメージを持つて日本に旅行に来た外国人が驚くこと」とありますが、外国人は外

国と日本とのどのような違いに驚くのですか。本文中に書かれた例のうちの一つをあげて説明しなさい。

問八 線⑥「心を自由」にします。」とありますが、本文中で筆者はどのようにすることで心は自由になれると言つていましたか。三十字以内で書きなさい。

三、次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(問い合わせの関係で、一部省略している部分があります。)

すごい空だつた。百トンはありそうなグレーの雲のかたまりを、湿つた風がゴゴゴゴゴと押し流している。ぼくの自転車も追い風を受けてペダルが軽い。背丈よりも高いひまわりの軍団が、首をそらしてお化けのように踊つてゐるのが、どうも気味悪かつた。入口のシャワーを浴びるとぞくつとくる。いつも超満員の市民プールもその日はさすがに人影がまばらだった。丸い池のような子供用に二人、学校と同じ縦二十五メートルの長方形のプールに十人くらいの寒そうな姿が見える。

ぼくは勢いよく飛び込むと、クロールで二十五メートルの往復を始めた。水は冷たかったが、こんなぜいたくなことでは出来やしない。四往復でいつたん上にあがり、今日の目標を決めた。十往復、五百メートル。うわお！ ぼくのクロールの限界は、もつか三百メートルだ。もつとスマートなターンのやり方について、ぼくが考えていると、ブオーというような音をたてて風がおそってきた。水面に小さな波がたつ。ぽたんぽたんと雨粒がやつてくる。さすがに、一人二人と帰りはじめ、やがてプールは本当にがらんとしてしまつた。広々としたブルーグレーの水面に雨粒があちこちで輪を作る。

その時だ。<sup>②</sup>ちようど一人だけになつた泳ぎ手にぼくの目は引きつけられた。男の子だ。年上かな？ ぼくよりも、だいぶサイズが大きく見える。そんなことより、問題は彼の泳ぎ方！ なんておかしな格好だ。クロール、バタフライ、犬かき、それらがごつちやになつたような泳ぎぶりなんだ。ふざけているというよりは、どう見ても、じたばたもがいている。溺おぼれるんじゃないかと、ぼくが心配になつた時、彼は一度立ち上がり、ゆっくり息を吸い込むと、またわきめもふらず泳ぎ出した。

少しづつ、少しづつ、彼はぼくのほうにやつてきた。そして、ぼくは気づいた。彼は腕を一本しか使わずに泳いでいるんだ。右腕。右腕だけ。だから、まっすぐに進めず、下手なボート漕ぎみたいに、ふらふらと回つてしまつた。左腕がない。ない、としか言いようがない。肩から先の空白に、ぼくは胸がつまるような息苦しさを覚えた。

彼はぼくの目をきつとらんだ。ぼくはあわてて視線をそらし、体中がかつかと熱くなつた。

「ごめん。つまり……」

下を向いたまま謝つたが、何を言つたらいいのかわからなかつた。

「おまえ、両方あるのに右に曲がるのな」

④その挑戦的な台詞を、意外にも澄んだ声で言い放つと、彼はプールサイドを歩いていつてバスタオルを体に巻き付けた。空白の左腕が緑の布に隠れる。

「バランスが悪いんだ」

大声で言いながら、こちらに戻つてくる青白い長身から、えたいの知れないエネルギーがきらきらとこぼれ落ち、ぼくは射すくめられたように身を堅くした。

雨足が強くなつた。プールの係員がたつた二人残つたぼくらを追い出しにかかる。更衣室で、義手をつけた彼は、着がえ終わつて⑤しているぼくに、名前を教えてくれた。浅尾広一。ぼくより二つ年上で、A-28の十一階に住んでいるという。

めちゃくちやな雷雨になつていた。

「走ろう！」

広一くんが叫び、ぼくは自転車をそのままにして、彼の後についていった。A-28の建物は、市民プールから歩いて三分もかからない。ぼくの住むC-3はもつと遠いため、彼は家へ来いと誘つてくれたのだ。

空をYの字に引きさいでいく紫の稻妻。すぐさまバリバリドッシャーン！

『中略』

エレベーターの中で、ぼくらは互いの姿を見てにやにやした。これぞ本物のヌレネズミだ。

「すぐにフロをわかすよ」

広一くんは言う。

「悪いなあ」

初めて会つたばかりなのに、と思うが遠慮できるような状態ではとてもなかつた。

お風呂、そして広一くんの服まで借り、ぼくらはすっかりくつろいで、冷えた麦茶などを飲んだ。広一くんの家はウチより、ひとまわり小さい。一部屋少ないと言つたほうがいいかもしない。流しやガス台、食卓、ソファーセットが一部屋に集まり、ガラス戸の向こうは狭いベランダになつていた。

「うちは二人家族なんだ」

広一くんは言つた。まだぬれたままの髪が額にはりつき、湯上りのくせに、青白い顔色をしている。ぼくらはソファーを背にして、じゅうたんにすわりこんでいた。そのほうが気楽な感じがする。

「昼間は一人なの？」

ぼくが尋ねると、彼は笑つた。

「夜もけつこう、一人」

それが、なんとも大人っぽい言い方だつた。

「母さんが、仕事で、どうしても旅行が多いんだよね。でも隣に叔母さんがいるから」

「へえ。お母さんって、旅行が仕事？」

「うん。なんというか、ピアニストなんだ。ジャズの。ジャズ・ピアニスト」

広一くんは奥の部屋のグランド・ピアノを見せてくれた。でかくて黒くて、ピカピカ。家で佳奈が虐待している、ぼろのアッپライトとはえらい違いだ。

「商売道具だからね。でも、苦情とかきて、母さんも練習に気を使うんだ。プロだし、音がガーンと出るわけ」

そして、ちょっとにかんだように口許をゆるめる。

「でも、もうじき引つ越すからね。母さん、結婚するんだ」

「ああ」

ぼくはわけのわからないあいづちをうつた。

「君の新しいお父さん」

「うん」

「うれしい？」

「え？」

広一くんは目を伏せて、にやにやした。

「いいんじゃない。かつこいい人」

「へえ。いいな。君のお母さんもかつこいいんでしょ」

広一くんは何も答えずに、グランド・ピアノのふたを開けた。カバーをはずし、右手の指が鍵盤に触れる。

きれいな音。胸にくーんとくるようないい音がした。広一くんは立つたまま、右手の指で、メロディーをたたいた。

「知ってる？」

「ううん」

「<sup>※5</sup>『サマータイム。ジャズのスタンダード・ナンバーだよ。母さんがすごくうまい。これを弾く時の母さんはそりやあ、もう最高にかっこいい！』

ぼくはうなずいたものの、ジャズという言葉だつてよく知らない。だから、広一くんが、

「伊山君、ピアノ弾ける？」

と聞いてきた時は、ちょっとオーバーすぎるほど、(B)とかぶりをふつてしまつた。

「ほんとに十本の指で弾いているのかなって思うほど、音がいっぱい出てくるんだ、母さんのピアノ。なんか、こう、きらきらと降つてきて、下からも(C)わいてきて、部屋が音でわあっとふくらむんだ。そりやあ、いいんだ！」

広一くんは、また鍵盤をたたきだした。ぼくは、しだいにその曲を覚えていった。胸にしみる感じがした。聴いたことがないほど悲しくてきれいなメロディーだ。

なぜか、午後の海を思い出した。どこにでもある、少し灰色がかった青い海。いいかげん泳ぎ疲れて、あおむけに浮かんでいると、広い空が白くまぶしく、波に揺られていつのまにかほのぼのと眠くなつてくる。幸せな感じ。なのに、ちょっと悲しい。

「うまいね」

ぼくは心からそう言つた。彼は単純にメロディーをなぞるだけではなく、和音にしたり、<sup>※6</sup>トリルをいれたり、右手一本で、ずいぶん華やかな演奏をしていたのだ。ぼくの耳にはそれがひどくきれいに響く。少なくとも佳奈の雨だれピアノよりは、聞いていてずっと気持ちが良かつた。

「三歳の時から、クラシック・ピアノをやつてたんだ。嫌いじゃなかつた」(7)

広一くんは、ふつと言葉をきつた。<sup>※7</sup>ぼくは思わず、彼の左側のぴくりとも動かない義手に目がいつてしまつた。彼はぼくの視線を感じたかのようになつた。

「これね、事故。自動車事故。左腕がめちゃくちやになつちやつた。でも、ぼくはこれでも運がいい方。運転していた父さん、体中

めちゃくちやで、死んじまつたからね。四年前だよ」

ぼくが、ああ、とも、うう、とも言えないうちに、広一くんはふりむいてにやつとした。

「好きな曲をぼくが右手のパートだけ弾くと母さんが伴奏をつけてくれる。知らない曲でもぼくの勝手な思いつきでの節でも、ぜんぜん平気。最高、気分いいんだ。キセキみたい」

そうして立つたまま、片手でまたピアノを弾き出した広一くんのノッポの後ろ姿は、冷たい霧にしんと包まれているように、底知れず静かだつた。<sup>※8</sup>ぼくは役に立たない自分の左手を握りしめた。ピアノなんて、さわったこともないけれど、せめて佳奈ほどでも弾けたらなあ、とつくづく思つた。

（佐藤多佳子『サマータイム』）

（注）※1 「ぶしつけ」：無礼。礼儀をわきまえていない。※2 「ジャズ」：アメリカ南部の黒人の音楽から発達した音楽

※3 「佳奈」：僕の一つ年上の姉。ピアノを習っている。

※4 「アップライト」：縦型のかべに沿つて置くことができるピアノ。

※5 「サマータイム」：ジョージ・ガーシュウィン作曲のジャズの曲。

※6 「スタンダード・ナンバー」：定番の曲。

※7 「トリル」：装飾音。ある音とその上または下の音を交ごに早く反復させて奏でる音。

問一 線①「こんなぜいたくな泳ぎはめつたなことでは出来やしない。」とあります、「ぜいたくな泳ぎ」とはどのような泳ぎですか。そのような泳ぎができる理由も含めてわかりやすく書きなさい。

問二 線②「ちょうど一人だけになつた泳ぎ手にぼくの目は引きつけられた。」とありますが、その理由を答えなさい。

問三

――線③「ぼくは胸がつまるような息苦しさを覚えた。」とありますが、その時の僕の様子を最もよく表現しているものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 左腕のない広一を、不自然なものとして違和感をもつて見ていた。  
 イ 自分の腕がもしかったとしたらと考え、ショックを受けていた。  
 ウ 広一には腕がないのに、自分は腕があるので申し訳なく思っていた。  
 エ 左腕がない広一を恐ろしく思っていて、その場から逃げ出したかった。

問四

――線④「その挑戦的な台詞」とあります。(1)それは具体的にどの台詞を指しますか。本文中より抜き出して答えなさい。  
 (2)また、どのような言い方をしたということですか。分かりやすく説明しなさい。

問五

――線 a 「目を皿のようにして」、b 「はにかんだように」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- a 「目を皿のようにして」  
 ア 目を細くして  
 ウ 夢中になつて

- ア 目を細くして  
 イ 何度も見返して  
 ウ 夢中になつて

- b 「はにかんだように」  
 ア 自慢げに

- ア 自慢げに  
 イ 面倒くさそうに  
 ウ ほつとしたように  
 エ はずかしがるように

問六

――線⑤「遠慮できるような状態ではとてもなかつた。」とありますが、具体的に僕はどのような様子だったのですか。本文中で言葉を使って書きなさい。

ア まごまご イ ふらふら ウ ぶんぶん エ ぎらぎら オ ゆるゆる カ ずんずん

――線⑥「雨だれピアノ」とはどのような弾き方ですか。次のア～エから最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 音がとぎれとぎれのぎこちない弾き方  
 イ なめらかに音がつながるリズミカルな弾き方  
 ウ 自信がなさそうな弱々しい弾き方  
 エ 力強い音が連打された迫力のある弾き方

――線⑦「ぼくは思わず、彼の左側のびくりとも動かない義手に目がいつてしまつた。」とありますが、この時の僕の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 嫌いじやなかつたピアノを義手になつて思うように弾けなくなつたのには、何があつたのだろうと氣の毒に思う気持ち。  
 イ 義手になつてうまくピアノが弾けなくなつたのだから、もう無理にピアノを弾かなければいいのにとあきれる気持ち。  
 ウ 両手で弾くのだとて大変な人もいるのに、右手だけで華やかに上手に弾けるなんて素晴らしいなあと賞賛する気持ち。  
 エ 義手になつて難しいクラシックピアノを弾けなくなつたから、簡単なジャズを弾いているんだなあとばかにする気持ち。

問十

――線⑧「ぼくは役に立たない自分の左手を握りしめた。」とありますが、この場で僕の左手はどう役に立たないのでですか。本文をふまえて答えなさい。